



元気な松本へ アイデアを

信濃毎日新聞社が松本本社に移転、新築に向けてスタートさせる「信毎 新松本本社 まちなかプロジェクト」。世界的な建築家で、新社屋の設計を手掛ける伊東豊雄さん(73)が「地元の皆さんと一緒に考え、設計だけでなく街づくりにも生かせる機会になれば素晴らしい」と意欲を示し、市民参加という新たな手法で取り組むことになった。プロジェクト全体のアドバイザーを、全国各地でまちづくり活動に携わるコミュニティデザイナーの山崎亮さん(41)が務める。

【1面参照】

松本本社に移転・新築

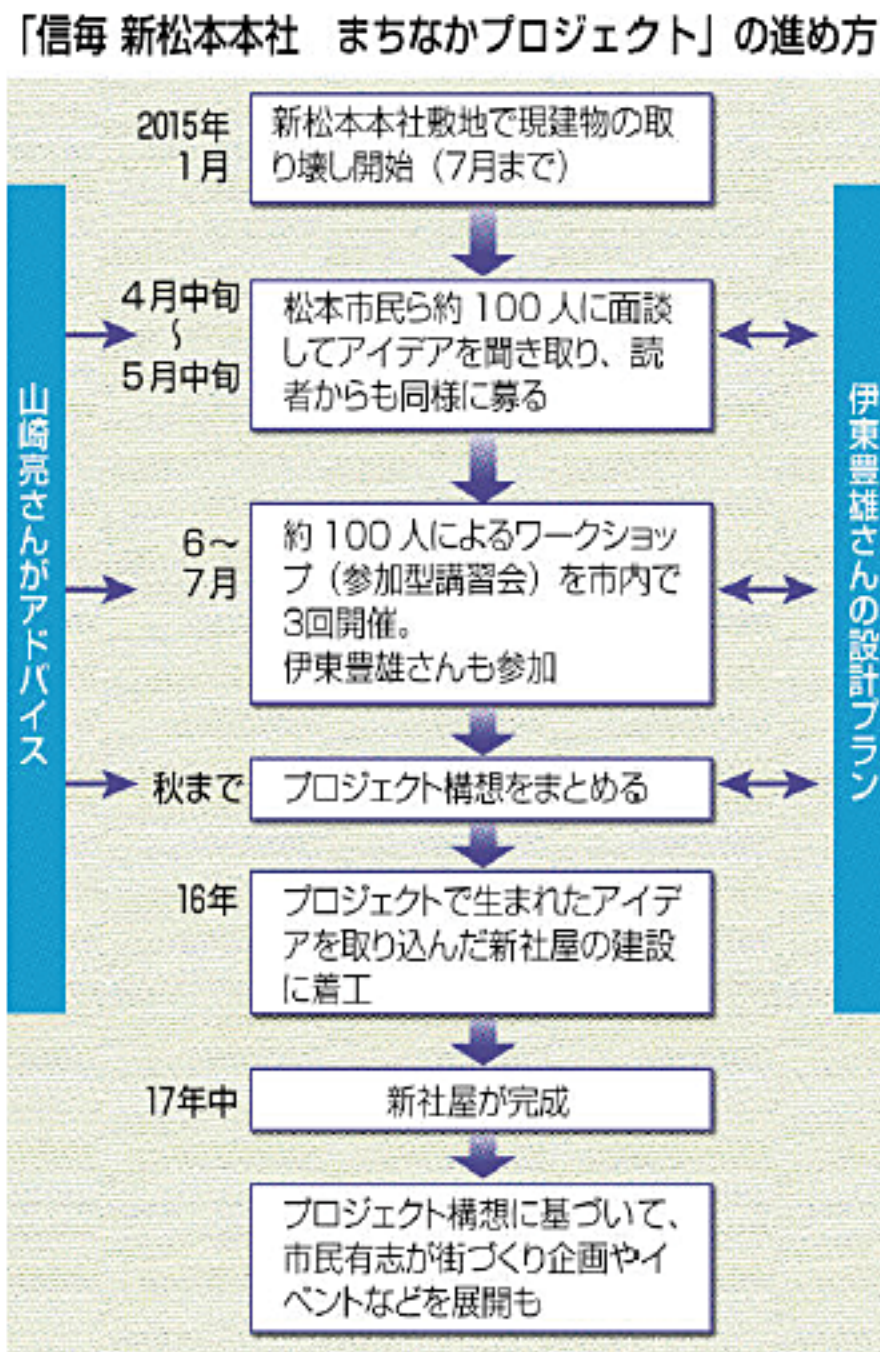
自由に討論 ワークショップで具体化

プロジェクトを進める中心メンバーは13人。信濃毎日新聞松本本社の報道、広告、販売、総務の各部の若手社員や松本平タウン情報の編集部長、街づくりの活動に関心がある松本市内の建築家、店主、信州大学の大学院生らで構成する。13人は今月中旬から5月中旬にかけて、地域で多様な活動に携わっている市民約100人に面談。新社屋を街の活性化にどう生かしていくか、期待する機能などについて意見や提案を聞いていく。同じ期間に、読者の皆さんからもアイデアを募る。

これをたたき台に、6~7月にかけて3回にわたって開くのがワークショップ(参加型講習会)だ。参加してもらおうのは市民ら約100人。グループに分かれ、車座になって自由に討論。松本の街なかで足りないもの、もっとあった方がよいもの、周辺でどんな街づくりができるか、自分がそこでやってみたいことなどを出し合い、整理し、具体化させていく。プロジェクトでは山崎さんが社長を務める「studio(スタジオ)ー」(大阪府吹田市)が協力。伊東さんと事務所スタッフ、山崎さんも話し合いの輪に加わり、伊東さんはアイデアを随時、設計などに取り入れていく考えだ。伊東さんと山崎さんのコラボ(共同作業)は初めて。二人は「プロジェクトが進むにつれて具体案が次々に生まれ、建設前から活動が始まっている」と楽しみにしている。



松本市の本町通りに面した信毎新松本本社建設予定地(中央のシートで覆われたビルと周辺)



地域と一緒に組み上げる

古里の信州で設計の仕事ができるのは大変光栄。松本市では、まともな市民芸術館(2004年完成)に次いで2件目となる。松本は全国的にも文化度が高く、芸術館の設計時にも足を運んだが、美しい街という良い印象がある。市民の誇りも高いと思うので、精いっぱい取り組みたい。今回は、新聞社の社屋という、民間ではありながら公共性を持っているという特徴があり、私にとっても初めての経験。設計の楽しみも意義もあると思う。新聞社は、お役所と異なり、常に自由な立場で主張する役割を担っている。そういった意味

新社屋の設計を担当

伊東 豊雄さん



合いを建築にどう象徴させるべきか、今も考え続けている。新社屋の敷地は市の中心部にあり、市民の期待も高いのではないかと、今も考え続けている。

いとう・とよお 建築家。2歳から中学3年まで諏訪郡下諏訪町で育つ。東大工学部卒業後、菊竹清訓建築設計事務所勤務を経て1971(昭和46)年に独立。代表作にまつもと市民芸術館(松本市)、せんだいメディアテーク(仙台市)、諏訪湖博物館・赤彦記念館(下諏訪町)など。「建築界のノーベル賞」と言われるプリツカー賞や、日本芸術院賞、ベネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞を受賞。2007年に第14回信毎賞。73歳。

建築家は個人のイメージを色濃く出したがるので、住民から信頼されにくいという矛盾を感じ続けてきた。そんな時に東日本大震災が起き、建築家は意識を変えないといけないと感じるようになった。住民の小さな声と向かい合うことで、自分が考えていなかったところへ到達していく。その方法には新しい可能性があり、21世紀はそうしたことを求める時代だと思う。

信濃毎日新聞松本本社の移転計画 現在の松本社は松本市南部、同市宮田の国道19号沿いにある。松本城に近い同市城西(二の丸)から1970(昭和45)年に移転。建物の老朽化が進んだため、利便性が高く、街

づくりにも貢献できる市中心部への移転を決めた。移転場所は同市中央2で、松本駅から北東へ約550m、お城に通じる本町通り沿いで、駅とお城のほぼ中間点に位置する。蔵のある街並みで知られる中町

通りや、女鳥羽川沿いの縄手通りに近い。建設用地は約3900平方m。1月から建物取り壊しを始めており、新社屋は16年着工、17年中の完成を目指している。

プロジェクトのアドバイザー 山崎 亮さん

街でしたいこと何ですか

ープロジェクトのアドバイザーを引き受けたのは。「伊東豊雄さんから打診を頂いた。伊東さんとは2年ほど前に雑誌の対談企画でお会いし、地域の人たちとの関わりを重視する考えが近いこともあって意気投合した。初めて一緒に仕事をするので、最高のデザインを作りたい」ー松本市の印象は。「市民の文化度が高く驚いた。喫茶店での会話でも、地元文化を自然に語っている。新社屋の建設地に近い中町通りでは、歴史的な建物を複数改修して使

っている。建築計画を住民とつくり上げていくプロジェクトが成り立つのではないかと考えた」ー山崎さんが先駆けとなった「コミュニティデザイン」とはどんな考えか。「地域住民が自ら地域課題を解決するのを手伝う仕事で、当事者意識を醸成していくイメージだ。住民参加型の街づくりや建物の建築デザインを作る際、住民の輪の中に入って一緒に考えたり、助言をしたりしながら、新しい発想を生み出すお手伝いをする。これまで250以上

のプロジェクトを手掛けてきた」ー今回のプロジェクトの進め方は。「ワークショップなどでは『こんな建物にしてほしい』といった要望型でなく、自分たちが街でどんなことをしたいのか、潜在的に感じていたことを出し合い、具体的な形にしていく。街づくりを担う市民の主体性をどれだけ引き出せるかがポイントになる。それがコミュニティデザインの面白さ。新聞社にとって市民との対話は、取材をはじめその後の活動に生きる人的な財産を得ることにもなる」



やまざき・りょう コミュニティデザイナー。愛知県長久手市出身。大阪府立大学大学院修士後、設計事務所勤務を経て2005年に「studioー」を設立。住民による地域課題の解決を支援する「コミュニティデザイン」に携わる。東大大学院工学系研究科を13年に修了。現在は東北芸術工科大学(山形市)コミュニティデザイン学教授(学長)などを務める。41歳。